**第８章　現代シンガポールの教育改革**

**―グローバル化への対応―**

7月8日（水）1限　青山・井上・高橋・古谷・山端

**第１節　教育システムと学力政策(pp.213～221)** 担当：古谷

（１）アジアの優等生

◇シンガポール共和国…人口440万人の都市国家（華人75.6％　マレー系住人13.7%　インド系移民の子孫8.6％の多民族国家）。英語を公用語の一つとしている。

◇６５年のマレーシアからの独立分離以降、能力主義に基づく社会・教育政策を推進し、高い教育水準と識字率、高い国際競争力を達成してきた。

　…国際教育到達度評価学会（IEA）の国際学力テスト（TIMSS）において1983年初等レベルの理科での初参加で１９か国中１６位という成績から2003年、数学・理科の両分野、初中等両レベルで１位になる。

→アジアの教育レベルの高さを印象付ける

　均質的社会が優位という常識を覆し、厳しい競争社会の存在を暗示、多くの多民族国家への示唆となる

（２）教育システムとメリトクラシー

◇シンガポールの学齢就学率は1990年代に初等教育で96％、中等教育で93％を達成していたが2003年に義務教育を導入

○初等学校６年間

　・１～４年次…基礎段階とされ、授業時間の80％が英語、母語、数学の学習に当てられる

　・５，６年次…オリエンテーションステージと呼ばれ、英語の読み書きと認知能力を保障しながら各人の母語の能力に応じてコース配属を行う。

…上級母語の学習、通常母語の読み書きをする学習するメインストリーム（93.2％）と母語を会話レベルでのみ学習するEM3（6.8％）

○中等学校

・初等学校最終年に実施される初等学校終了試験（PSLE）の結果に基づき、生徒は中等学校から普通、速習、特別の３コースに分属される

・普通コース（35.8％）…4年間のコース終了でGCE-Nレベル試験を受験できるがさらに1年間勉強してGCE-O（「普通」教育認定試験）レベル試験受験も可能

・速習コース（52.8％）…４年間で通常の英語と母語を学習してGCE-Oレベル試験を受験

・特別コース（8.5％）…４年間で英語の他に高GCE-Oレベル試験を受験

○中等後教育レベルの教育機関

　・大学予備門…ジュニアカレッジ（2年）、中央学院（３年）。修了時にGCE－Aレベル試験（「上級」教育認定試験）を受験し大学または学位課程に進学

　・ポリテクニク…実務志向の教育機関として3年間のコースを提供。修了時にディプロマを授与

　・技術教育学校…GCE-Oレベル以外にGCE-Nレベルの保持者や有職成人も就学可能な１～２年の技術課程。国家技術教育校証書という学位を授与。

近年では成績が極めて優秀な者に対して中等教育と中等後教育6年間を一貫させた教育プログラムを設置

→途中のGCE-Oレベル試験を免除することで試験に煩わされないより広く多様な学習が可能に。

　（例）シンガポール・スポーツ高校、NUS科学高校

◇学校の設立形態

・初等学校…173校全て公立（うち41校は政府補助学校）

・中等学校…156校。政府立校110校、政府補助学校20校、独立校５校、自律校21校

　　　　　　自律校：独創性と専門性の高い教育を安価な授業料で提供

（３）才能児教育プログラム

◇天然資源に乏しく発展途上のシンガポールにとって人間が最も重要な国家資源

　→社会のリーダーの果たす役割を重要視

◇「教育に期待される成果」

　１、中等教育もしくは高等教育を修了した全ての学生は道徳的に高潔で文化的に根差し、多文化主義とメリトクラシ―の原理を信奉する人物

２、われわれの運命をデザインし導き、先見性をもって乗り越え、知識社会において活路を見出し、社会を改善し、可能性に対して不屈に戦う、創造的で志気高い人物

→将来のリーダーとなる才能児を識別、育成するために独特の才能児教育システムが生み出されてきた

◇才能児教育プログラム（GEP）

・文部省内の才能児教育局の企画・管理の下で９つの小学校（４～６学年）と2つの中学校に特別クラスを設置

・初等学校３年生の受験者から人口約１％にあたる500人が４年次から配属され、中等学校GEPには初等学校GEPでの成績や評価、PSLEの成績から継続可否が審査される。通常ストリームからの追加も可能。

◇GEPのカリキュラム・シラバス

・基本的には通常のストリームの学校と同じだが創造性と高度な思考技能により大きな力点が置かれている。

・追加プログラムとして科学・メントールシップやキャンプなど課外活動がある

・小学校4.5年及び中等学校1～3年の全生徒に対して個人研究活動（IRS）を推奨

◇才能児教育プログラムの教員養成

・本人からの申請と才能児教育局とGEP学校の校長との協議による

・新規のGEP教員は才能児教育の基礎コースでその概念やカリキュラム分化の原理などに認識を持つ

◇GEPプログラム修了生

・ほぼ全員がジュニア・カレッジ、大学に進学し、優秀な成績を収める

・兵役などの社会的活動においてリーダーとして活躍

**第２節　政府主導の教育政策(pp.221～226)** 担当；山端

（１）思考する学校、学ぶ国家

◇1997～　思考する学校、学ぶ国家（TSLN）

「シンガポール国民に対する生き残りと先進性の維持をかけた戦略」

◇思考する学校…思考の技能を公式的に教えない。絶え間ない学習・学習文化の推進

◇４つの柱

①批判的・創造的思考②教育におけるITの活用③国民教育④行政改革

→個人と社会の双方が発展するための能力

（２）シンガポール版　ゆとりの教育

◇2004～　教えすぎず、学びを促す

子供たちが学ぶこと・考えることを激励する試み

→多様な選択肢の提供＋学習者の動機づけ、学習ガイド能力の向上

→テストだけでなく、個人の能力や興味に応じた学習

学習の焦点…量から質へ

具体的な取り組み

・カリキュラム削減（空いた時間は教員が教材を開発するなどの自由時間）

・教員の研修制度

・市民性教育・道徳（情緒・社会性学習）

・カウンセラーを3000人に、教員の加配、支援指導員の配置

**第３節　マンパワー政策と高等教育(pp.226～229)** 担当：井上

（１）「東洋のボストン」構想

◇シンガポール高等教育の歴史

1905年　シンガポール医学校

1928年　ラッフルズ・カレッジ　　　　　　　　　高等教育の起源

1949年　２校が合併→マラヤ大学

人文、理、医、教育、工、法、農の７学部を持つ総合学位学位授与大学となる

1955年　南洋大学創立（華人社会の寄付による）

華語媒体の流れの始まり

1957年　マラヤ連邦独立

1959年　マラヤ連邦首都クアラルンプルにマラヤ大学クアラルンプル分校設立

1965年　シンガポールがマラヤ連邦から分離→マラヤ大学シンガポール校がシンガポール大学に

1980年　シンガポール大学と南洋大学が合併→国立シンガポール大学

（英語ストリームへの統合の進行によって南洋大学への進学者が減少したため）

1992年　南洋大学の跡地に工科大学設立

現在の南洋工科大学

2000年　シンガポール初の私立大学であるシンガポール経営大学設立

◇各大学について

〈シンガポール国立大学　NUS〉

・７つの学部（文社会科学、ビジネス経営などなど）

・２つの学部レベルの学科

・全部局が学士およびそれ以上の学位を授与している

・生徒数：22000人（2005年）

〈南洋工科大学　NTU〉

・工科カレッジと３つの学科

・１機関である国立教育学院が教員養成を実施

・生徒数：18000人（2005年）

〈シンガポール経営大学　SMU〉

・ペンシルベニア大学のワートン校との提携ビジネスカリキュラム

◇政府の目的

シンガポールの大学を世界水準の大学にし、ボストンのように世界の優秀な人材が集う学術都市にする

**➡「東洋のボストン」構想**

外国からの教員、研究員、留学生を積極的に招聘

・留学生比率：２割

・教育部門の半数が外国人スタッフ

・アメリカ、中国、ドイツなどの大学と提携プログラム実施

・海外に分校設立

◇大学制度の多角化

1. 伝統的国立大学
2. それらの大学の海外展開
3. 外国の一流大学分校、キャンパスの誘致
4. 国内外の企業などによる私立大学

（２）マンパワー21

◇マンパワー21展望

1999年、シンガポール政府人的資源省が提出した報告書。シンガポールの持続的経済発展を支えるものは、知識の生産、利用、伝達による経済が中心となり、人的および知的資本の育成と蓄積が中心的戦略となるという展望を示した。

→「才能資本」という概念を打ち出し、シンガポールをグローバルなマンパワーが集

　う場となることを提唱。

◇戦略

・インフラ整備

・国際企業が進出するための労働許可の見直し

・インターネットによる国際的タレント（才能者）のリクルート

・在外シンガポール企業のプログラム開発

・外国人労働者政策の見直し

◇具体的政策

・アジア各国から「知的移民」の受け入れ奨励

・卒業後６年間のシンガポールにおける労働を条件に学費免除、奨学金の提供を行い、優秀な人材をシンガポールに留学させる

・国立大学の入学者選考に際してSATの導入

**第４節　マイノリティへの対応(pp.230～235)** 担当：青山

（１）教授言語ストリームと国民統合

◇シンガポールの人口

・華人75.6％、インド系8.6％、マレー系13.7％

シンガポールの言語

英語、マレー語、中国（様々な地方の方言を含む）語、タミル語（タミル語以外のインド系諸語を含む）

◇多言語状況に対する政府の対策

・様々な言語に対応した学校が並立した教育的多言語状況が存在

・多人種主義、多言語主義、多文化主義を打ち出し、共通カリキュラムと補助金政策を展開。

↓

↓英語教育の価値が着目され、英語学校の需要が高まる。

↓

・マレー語、タミル語学校が廃止。1987年英語を教育第一言語、母語を第二言語とした。

↓

↓英語化により西洋文化・個人主義への傾倒、アジア伝統文化の軽視を危惧

↓

・道徳教育強化や、「華語を学ぼう」運動」などを推奨

・1991年に「国民共有価値に関する白書」を提出。

⇒①国家と社会の優先性

②社会の基本単位としての家族

③コミュニティによる相互扶助

④対立よりも合意

⑤種族的・宗教的な調和

を共有すべき価値と定め、アイデンティティ強化

・1999年「国民教育プログラム」

（２）民族教育格差問題

厳しい選抜や淘汰

　　　　　　　　↓

児童間の学習到達度の格差、経済・社会的地位格差を生む

マレーシアでは格差解消のための積極的差別であるアファーマティブ・アクションを実施⇔民族平等とメトクラシーの原則によりシンガポールは自由競争を貫く。

↓

英語以外の教育現場を消滅、一部の系統の社会経済・教育的格差を拡大

（３）マレー系の自助教育組織

◇大学までの授業料を無償化、補習や促進コースを設置

　　　　　　　　　　　　↓

自助努力を促し多民族との教育的競争に勝ち抜くことを要求

◇マレー系議員を中心にムスリム児童教育評議会(略称　ムンダキ)を結成。政府から全面的支援を得て、1982年活動開始。

①週末補習クラスによる、初等学校から大学予備レベルまでの公的試験準備の支援

②試験で優秀な成績の生徒と、高等教育に進学する生徒に対する奨学金、教育ローン提供

③教育的成功のための家庭支援とイスラーム的価値の促進

を重点化して活動展開。資金面のシステムも整備され、利用者も拡大した。

◇1989年 MENDAKIⅡという法人に改組。シンガポール・ムスリム・コミュニティ開発評議会となる。マレー系の生徒の無償特権を解消し、貧しい学生の奨学金や教育ローン、その他の教育プログラムの拡充を目指した。

◇1991年　ムスリム専門家会議

MENDAKIに対する政府の関与に反発を示す一部の学者により結成。教育面、政治面、文化面、宗教面においてより発達したムスリム・コミュニティのモデルとなることを目標とした。

◇1999年　イスラーム・マレー問題研究センター

現在は9つの就学前センター、5つのトレーニングセンター、2つの保育所を保有し規模を拡大

これらの教育自助支援組織の20年間の活動の成果は、多方面に認められているが前社会的に顕著ではない。

➡教育成果が国家試験での合格率のみによって判断され、難易度の変化する試験では、マレー系の経年的な変化が読み取れない。

◇まとめ

シンガポールに限らず、社会構造のヒエラルキーがある社会における政府の努力は、国民の意識を分化させ、民族間の核さを拡大させてきた。シンガポール政府は民族間の教育における格差を個人の差異に帰着することができず、対策として民族意識や宗教的団結、互助精神に働きかけようとした。

【論点】

第1節（３）才能児教育プログラム第1段落（p.219）に〝天然資源に乏しく、発展途上のシンガポールにとって、人間こそが最も重要な国家資源であり、地球規模の競争に生き残るために、社会のリーダーの果たす役割を重要視している。才能ある個人やリーダーは国家の経済と科学技術の発展の原動力であり、国家発展の方向性と手段を国民に指し示す水先案内人としての役割も担っている。″とある。

➡天然資源に乏しい点は日本もシンガポールも共通であるものの、日本では才能児教育プログラムは実施されていない。

1. シンガポールの才能時教育プログラムの内容を踏まえて才能時教育プログラムの利点・欠点を挙げる
2. ①を踏まえて、日本で才能児教育を取り入れるべきか否か。